

# 建築家資料群に含まれる船室デザイン資料

美術工芸資料館 特任専門職 学芸員 佐藤安乃

美術工芸資料館には、建築家・村野藤吾（1891・1984）の建築設計図面をはじめ、複数の建築家や編集者の資料が収蔵されている。本記事にてこれらの建築関係資料を紹介するのは、7年ぶりとなる。今回はその中から、美術工芸資料館にて先般開催した展覧会「海をゆく建築——村野藤吾と本野精吾の船室デザイン」（2025年6月2日～7月12日）に出品した資料を中心に、建築家資料群に含まれる船室デザイン資料について紹介したい。

現在では、建築家と船にはあまり関わりがないように思われるかもしれない。しかし、船が国力を示す存在として考えられていた1920～30年代の日本では、客船、とりわけ海外と日本を結ぶ豪華客船の船室デザインには、国内の著名な建築家が関わっていた。村野藤吾もそのひとりである。

村野藤吾が携わった代表的な客船として、「あるぜんちな丸」と「ぶらじる丸」の二つの姉妹船が挙げられる。これらは、大阪商船（現・商船三井）が就航させた南米航路の客船である。基本設計には、当時の大阪商船で多数の船を手がけてきた工務部長・和辻春樹（1891・1952、哲学者・和辻哲郎の従弟）があたった。

残された「あるぜんちな丸」（1939年竣工）の図面から、村野藤吾は「等食堂」、「等スモークキングルーム」、「等ペランダの室内裝飾設計を担当したと思われる。図面の中で最も特徴的なのは、「一等スモークキング 正面出入口扉薄肉彫刻及象嵌模様」図1である。「象嵌（ぞうがん）」とは、一つの素材に異質の素材をはめ込む工芸技法を指す。図面内にはケヤキ、チーク、コクタン、トチ、モミヂ、メー

プルなど、彫刻に使用するさまざまな木材が詳細に記されている。また、ヤシの葉や鳥、水瓶が描かれる図柄は、南米航路にちなみ南国や熱帯樹林を表現しているようにみえる。

「あるぜんちな丸」から約半年遅れのペースで建造された「ぶらじる丸」（1939年竣工）では、村野藤吾は「等スモークキングルーム」、「等ロウンヂ（ラウンジ）」の設計を担当した。一等ロウンヂの平面図と天井伏図（図2）からは、国内産の大理石が巻かれた4本の丸柱や、梁を利用し植物模様が蒔絵のように施された間接照明が確認でき、材料や装飾からその豪華さがうかがえる。また、照明の周囲には尾州産のヒノキを使った楕円形木枠が巡らされており、十二星座の象嵌が見られる。日本的でありながら、繊細なモチーフが散りばめられ、「あるぜんちな丸」よりも欧風のデザインに近づいた印象である。

「あるぜんちな丸」と「ぶらじる丸」は、ともに日本国内産の木材や大理石などを用いて、豪華に製作された。単に図柄を描くだけでなく、空間を想像したうえで適切な材料を検討し、詳細に図面に文字を書き込んでいる点は、建築家による船室の図面の特徴といえるだろう。

村野藤吾は船室の設計について、次のように述べている。

おもしろいですね、実に。金をかけさせてくれるモノ。自由自在ですワ。制約はありますけれども、船会社の一声でいくら変えても知れたもんじやないかといえば、思う通りにさしてくれ

は、当時非常に珍しいことであった。

「橘丸」には外形・内装ともに、当時の飛行船や自動車でブームとなっていた「流線形」が採用されている。外形の流線形は構造上の問題等から限定されたが、談話室（展望室）の写真からはその形を見ることができ（図3）。椅子も同様に丸みを帯びたデザインで、本野精吾によるオール・デコ調のモダンデザインが、客船にも実現されていたことがわかる。

これらの客船のほとんどは現存せず、カラー写真も残されていない。そうした中で船室デザインを振り返る際、カラースキーム（着色透視図）は貴重な資料となる。カラースキームは、内装を担当する建築家や装飾会社などが、発注元である海運会社への提案のために描いた完成予想図を指す。例えば村野藤吾が設計した「あるぜんちな丸」の一等食堂を描いたカラースキーム（図4）では、表面が漆塗りで仕上げられた天井のランプシェードの光沢ときらめきを、銀色のスパッタリングで表現している。建築家の手元に残されたカラースキームは、必ずしも実現した案とは限らないが、装飾や配色の検討過程を示すものとして価値がある。

村野藤吾、本野精吾の資料に加えて、もう一名、本学の卒業生に

ますワ。

——「対談・建築美をさぐる8章」『国際建築』第22巻第4号（美術出版社、1955年4月）より

また、図面資料とともに美術工芸資料館に預託された図書資料の中に、フランスの豪華客船「ノルマンディー」の雑誌特集号（L'Illustration, 1935）が含まれている。背に自身のイニシャルを箔押しして製本され、見開きにはサインもされていることから、客船や船室デザインの参考文献として愛読していたことがうかがえる。村野藤吾にとって船室デザインは、彼の戦前の設計活動の中でも精力を傾けた創作活動のひとつといえよう。

村野藤吾がこれら二つの外国航路の船室デザインに携わる少し前、本学にゆかりのある人物が、戦前・戦後をとおして人気を博したある船をデザインしていた。その人物とは、本学の前身のひとつである京都高等工芸学校図案科教授をつとめ、本学3号館の設計者でもある建築家・本野精吾（1882・1944）、その船は「橘丸」（1935年竣工）である。

「橘丸」は、東京湾汽船（現・東海汽船）が就航させた、伊豆大島及び伊豆諸島を巡る客船で、「東京湾の女王」とも呼ばれていた。第二次世界大戦では病院船・陸軍配当船への改造やアメリカ軍による拿捕があったが、戦後は東京大島航路に復帰し、1973年の引退まで人気を博した。この「橘丸」は、船体のデザインと船内装飾の両方を本野精吾が担当したが、建築家が船体のデザインに関わるの

よる船室デザインを確認できる資料が収蔵されている。1907年に京都高等工芸学校を卒業し、国会議事堂の意匠設計の担当者のひとりでもある建築家・吉武東里（1886・1945）による「出雲丸」のカラースキーム（図5）である。「出雲丸」（1942年竣工予定、実現せず）は、日本郵船によってサンフランシスコ航路に就航する豪華客船として計画されていた。1939年に起工し、建造が進められていたが、1941年に海軍に徴用され、航空母艦「飛鷹」に改造されたため、客船としては実現に至らなかったものである。カラースキームをみると、中央奥の暖炉にある壁面には満開の桜が緻密に描かれていることがわかる。実は村野藤吾や本野精吾もこの船の船室デザインの一部をそれぞれ担当しており、本野精吾資料の中には、2つのカラースキームが残されている。一方には正面に松竹梅を描いた大きな壁画があり、他方には花を描いた壁画と天井付近に鼓や笛などの和楽器のモチーフが見られる。このように、外国航路に就航予定であった「出雲丸」の船内装飾は、「あるぜんちな丸」や「ぶらじる丸」と同様に日本文化を世界に示すべく、日本らしいモチーフが多数配された。本学及び美術工芸資料館の収蔵資料との関わりが深い3名が、同じ船のデザインで協働した可能性を考えると、実現に至らなかったことが惜しく感じられる。

ここまで挙げてきた船のほとんどは、太平洋戦争の開戦に伴い海軍に徴用され、空母に改造されるとともに、砲撃や触雷によって沈没、廃船となったため、短命に終わってしまった。また、客船として活躍した数年間も、とくに熱帯域を航行する南米航路の「あるぜんちな丸」や「ぶらじる丸」の航海は、現在の船旅とは異なり過酷なものであったと推測できる。そのような状況で、建築家が当時の日本の最上級の技術・芸術を結集させ、地上の建築と同様に、またそれ以上に華やかかつきらびやかにデザインした船室は、航海を彩ったに違いない。船室の実物を見ることはできないが、残された図面や写真から、建築家が船室に込めたそれらの意匠を確認できることは救いである。

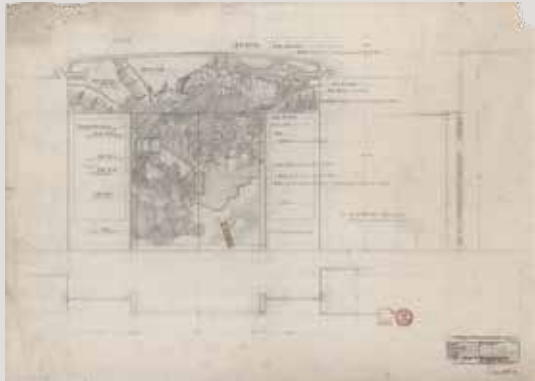


図1 村野藤吾『34（あるぜんちな丸）一等スモークキング 正面出入口扉薄肉彫刻及象嵌模様』AN.4950-84

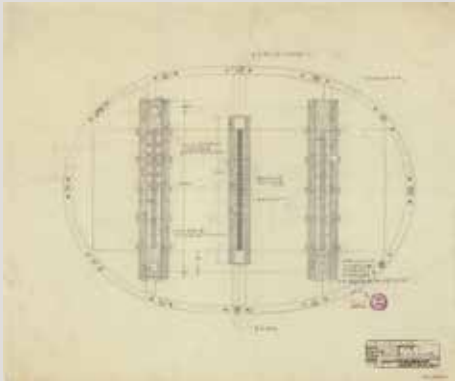


図2 村野藤吾『35（あるぜんちな丸）等ロウンヂ 天井伏及船艀象嵌模様設置詳細図』10306・AN.4950-03



図3 本野精吾『橘丸 談話室（展望室）』10305頃 AN.5343-152



図4 村野藤吾『34（あるぜんちな丸）等食堂（長崎）』AN.5305-73



図5 吉武東里『60（香線（出雲丸）一等喫煙室 室内透視図）』AN.3831-01